



# 教職大学院 Newsletter

# No. 9

福井大学大学院 教育学研究科 教職開発専攻

09.01.16

## 一人の教員の学びは確かな教育に

福井県特別支援教育センター所長 松井富美恵

平成 21 年が始まり、皆さんそれぞれが気持ちも新たにスタートされていることと思います。

さて、先日のことですが、県内の特別支援学校教員を対象とした医療的ケアに関する教員研修会を開催しました。研修会の終了後、講師のお一人で救急蘇生の実習を指導してくださった消防署の救命士の A 氏に感想をお聞きしていた中で、「研修を受講した先生方は過去に救急蘇生の実習や AED の使い方を習った経験があるため、やり方が『よく分かった』と知っている印象があった。本当に分かったと言えるには今日習ったことを自分の学校の他の先生に伝えること、伝達し共有することが大切で、正しく伝達できて本当に分かったと言える。」という話がありました。正にそのとおりですね。そして、「最後に、このことを受講者に言おうと思っていたのに忘れてしまった。」と振り返って反省の弁を述べられました。私には、まだ若い救命士 A 氏の仕事への前向きで真摯な姿勢がとても印象的でした。また、A 氏が、「救急蘇生の内容も医療などの進歩に伴い変化しているため常に勉強です。」とおっしゃったのを聞き、私は、彼の専門分野での活躍を期待するとともに、同じように、教員研修の分野も社会や時代の状況に応じて考えていくべきだと改めて感じました。

ところで、国語の教師で、プロの教師として「教えること」を厳しく追及された「大村はま」先生の教育について前々から関心があり、先日、ようやく、「教師 大村はま 96 歳の仕事」(小学館)に目を通すことができました。生涯現役教師として活躍された先生は、残念ながら、平成 17

年に 98 歳で亡くなられたそうですが、「教えることとは」「子どもを知るには」などの内容に、多々得るものがありました。国語教育だけでなく、教育のどの分野にも通じる内容で、もちろん特別支援教育にとってはなおさら教育の原点のようなもので、時代が移っても変わらないものがここにもあったと思いました。すべての教員にとって、むしろ経験が豊かであっても、研修・研鑽は欠かすことができません。以前のように自己研修・自己研鑽に頼るのではなく、より意図的で組織的な研修が必要になっています。

今、変革の節目に立ち会っている皆さん、福井大学教職大学院での学び合いは、自らを振り返り、新しい自分を創っていくまたとない機会であり、単に所属校にとどまらず、県内各地域のリーダーとして活躍するに違いありません。教育は人づくりです。人とのつながりや協働は予想以上に強い力を発揮します。一人の力が小グループの力に、そして、やがては大きな力に発展し、質の高い教員の育成と元気な子どもの教育に貢献するものと確信しています。

### 内容

- 一人の教員の学びは確かな教育に (1)
- 冬の集中講座を終えて (2)
- 拠点校だより (4)
- 臨任ゼミ紹介 (5)
- スタッフ紹介 (7)
- 書評『ハーバード・ビジネス・レビュー』 (10)
- ラウンドテーブル予告 (11)
- 教職大学院報道ファイル (12)

# 冬の集中講座を終えて

12月25～27日、1月5～7日に、冬の集中講座「公教育の課題／学校と社会」が行われました。講義の受講、グループでの協議、個別での報告書作成作業など様々な活動を通して、長期実践報告会に向けて、それぞれ学び合いました。今回は、講座の様子をお二人の先生に報告していただきます。

## 2008 冬季集中講座を終えて

松田 淑子（教職大学院准教授）

2008年12月25～27日および2009年1月5～7日、M1の院生の方々に加え、来年度入学予定の一部の先生方が受講され、冬季集中講座が実施された。共通テーマは「公教育の課題/学校と社会」であった。

今年度のスクールリーダー養成コースは全員1年履修のため、先生方にとっては長期実践報告の執筆とその練り上げを行う重要な講座となった。また、教職専門性開発コースの院生も1年間の実践を活字化して発行することが決定し、これまでのインターンや臨任での実習を振り返り、その総括を行うための重要な期間となった。

私は、教職専門性開発コースの院生のグループを担当したのであるが、そこでの主な話題は、これまで日々書きつづけてきた有りのままの実践記録をどうすれば「長期実践報告」にできるのかについてであった。その不安や迷いは話し合いを通し、「点在していた日々の実践に筋を通すこと」、「自身の実践を俯瞰すること」など、ぼんやりではあるが少しずつ見通すことができていった。もちろん、それを具体的にを行うのはまた一段と難しい作業であり、甘くはないのだが、そのチャレンジが彼らの授業に対する意識を深めていくターニングポイントになるのではないかと、私自身の若いころの経験から推察している。

3日目のクロスセッションは、スクールリーダー養成コースの先生方のゴールに向けた熱気と、教職専門性開発コースの若い皆さんのとまどいや組み替えのうねりと、入学前の先生方の試行錯誤が相俟って、広がりや深まりのあるものになったように思う。それぞれの立場からのアプローチが、クロスセッションによって、別の角度から大きな勇気やヒントを与え合っただけではないだろうか。仕事との同時進行の中、実践を省察し書くことは、想像以上に骨の折れることであるが、個人としての実りとなるだけでなく、実践を共有し合えることによる大きな実りもある。

思えば、昨年度の冬季集中講座は、教職大学院がまだスタートもしていない中、入学前の先生方にとってのみならず、我々スタッフにとっても、先の見えない中での無我夢中の講座であった。今年度は、この間の経験と手ごたえと何より院生の皆さんの熱意に支えられて進めることができた。一年の重みと成果を実感し、感謝の気持ちでいっぱいになった。

院生の皆さんには、くれぐれも健康に留意され、ラストスパートを頑張ってください。心からお祈りしております。



全体オリエンテーションの様子



グループでの相談の様子

## 未知なる世界への挑戦 一冬の集中講義を終えて一 向 誠隆（福井大学教育地域科学部附属中学校主幹教諭／教職大学院客員准教授）

3日間だけではあったが、院生の皆さんと一緒に冬の集中講義に参加した。院生の先生方の未知なる世界に挑戦している様子は、部屋全体に何ともいえない雰囲気を出し出し、私自身も刺激を受けた。

メインは、長期実践報告の作成。スクールリーダー養成コースのどの先生方も悩んでおられたのは、報告書の目次、いわゆる構成である。大学院に入る以前の自分、大学院の始めのころの自分、そして現在の自分をいう変遷を書くというのは、正に未知なる世界に入っていくことなのだろうと思う。私も、数年前に同じような論文を書いた経験がある。自分を見つめ直すという経験が、それまでの教師生活の中で皆無であり、どこからどう振り返っていいのか分からなかったことを思い出した。

先生方のこのような悩みに共感しつつ、2日目の最初に4名のスクールリーダー養成コースの先生方と簡単な構想の報告会をしたのだが、その報告内容に驚いた。どの先生方も、学校の中で大きな改革の渦を巻き起こしているのだ。この4名の先生方は、当たり前ではあるが、勤務校や校務、同僚、そして自分のやりたいこともすべて異なる。それなのに、自分の勤務校の中で、自分の校務の立場から、

様々な同僚性を育んでいるのだ。特に印象的だったのが、最初はその先生が試みようとすることに批判的だった同僚が、一度その体験をされた後に、肯定的な態度に変わったという話であった。

学校を変えることがそんなに簡単なことではないことは、少なくとも私が附属中学校に来てから、自分の学校はもちろん、多くの学校の取組や各先生方のお話から学ばせていただいたことである。スクールリーダー養成コースの先生方が、この1年、正確に言うと約9か月で実に多くの石を学校の中に投げ、良い波紋が広がっている。私は、先生方の勇気とチャレンジ精神と謙虚さに、本当に感銘を受けた。

長期実践報告書の話に戻るが、この実践記録もまた正しい答えがあるわけでもなく、自分で試行錯誤しながら進んでいかなければならない。この集中講義に参加された来年度入学予定の先生方と話をし、正しい答えがないということは本当に苦しいことなのだろうと改めて感じた。しかし、未知なる世界に挑戦し続けておられる先生方を見て、多くの学校で、実践を繰り返しながら学校改革が展開されていくことを期待するのは、私一人ではないと思う。



個別に作業も進めます



講義の時間の様子



# 拠点校だより

各地の拠点校でスクールリーダー養成コースの院生を中心に校内研究が活発化しています。今回は、美浜中学校の知場克幸先生と福井大学の石井恭子先生に拠点校だよりを共同で執筆していただきました。

## 美浜中学校

石井 恭子（教職大学院准教授）

知場 克幸（スクールリーダー養成コース／美浜町美浜中学校教諭）

授業研究会の開始時刻になると、広い会議室に教員全員が集まってきます。すぐに机を動かして6つのグループに分かれ、話し合いが始まります。50分ほど話し合った後、それぞれのグループでの話題を紹介し合います。美浜中学校では、こうした授業検討会を月に1回程度行っています。

これまでの取組について少し御紹介しましょう。

### ◆ 授業研究のための体制づくりと1学期の取組

平成20年4月に、授業研究という視点から校内の研究体制・研修を見直し、「公開授業と授業検討会を定期的を実施すること」を提案しました。そのため、これまでの3つの部会体制を組み替え、研究部会の会議や現職教育の時間を授業研究に充てることにしました。

まずは、授業者が公開して良かったと思えるような会にしようとして提案しました。授業検討会では、授業の欠点や課題などを述べるのではなく、生徒がどのように学んでいるのかに焦点を当て、参観者自らが学び、自らの授業改善に生かすことを目標としました。授業を公開して互いに見合い、授業検討会で話し合っていくなかで、教員一人一人が授業を見る力を付け、授業への意識が高まることを期待したのです。1学期は、公開期間を3サイクル作り、すべての教員が公開授業を実施することにしました。検討会は期間の最終日に小グループで行います。自習時間を多く作らないよう、手すきの教員が自主的に参観することにして、検討会のグループはその都度編成しました。さっそく、研究推進部の教員を皮切りに次々と授業が公開され、約1か月半の間に28の授業公開と3回の授業検討会が行われました。授業検討会では、日ごろの思いを打ち明ける活気にあふれ、中堅教員は授業に対する考えや大切にしていることを語り、若い教員は参考にできることを聞き取ろうとしていました。公開授業に挑戦し、授業検討会で話し合うことで授業者自身に新たな気づきが生まれ、授業改善に前向きに取り組む姿勢が出てきたことが感じられました。



### ◆ 授業改善ワークショップと2学期の取組

7月下旬には、年齢構成を意識したグループで授業改善のためのワークショップを行いました。「教師のしゃべり過ぎ」「多忙化により教材研究不足」「グループ学習が難しい」など、具体的な授業改善イメージが語られました。また、若い教員グループでは、授業中の私語や宿題提出の指導など、今まで一人で抱え込んでいたことを安心して語り始めました。お互いの立場をよく理解したもの同士が持つ「信頼感」や「開放的な雰囲気」を、年代や教科を超えた授業検討会にも持たせる必要性を感じました。

そこで、2学期は授業検討会の構成メンバーを固定し、同じ学級を担当する教員同士で6つのグループを作りました。公開授業の方法も、一日公開日を設定したり、2週間の期間の中で自由に公開したり、様々な試みをしています。10月には、一つの授業を全員で参観して小グループで話し合う機会も作りました。12月には、金津中学校からも授業検討会への参加があり、教科や年齢を超えた小グループでの活発な話し合いに感銘を受けて帰られました。

4～5名の固定メンバーでの話し合いは、会を重ねるごとに活発になり、内容も深まってきたように感じています。相互に授業を開き、語り合う経験を積み重ねることで、互いに信頼関係が生まれ、日常的に授業について熱心に話し合う雰囲気が職員室の中に創り上げられるよう、今後もさらに、力を尽くしていきたいと考えています。

# 臨任ゼミ紹介

教職専門性開発コースには、臨時任用講師の院生が6名います。ストレートマスターの院生に比べると、勤務の都合で、大学になかなか来られないということもあり、臨時任用講師の院生を対象に、月1回程度、大学で「臨任ゼミ」を行っています。通常学級で授業実践を行っている3名と特別支援学校に勤務する3名に別れて、それぞれ、指導教員と共にゼミを行っています。今回は、その様子を3名に報告していただきます。

## 教職専門性開発コース 河合 啓子（鯖江市 立待小学校）

4月から小学校1年生の担任という大役に就かせていただき、それからの2か月間は悩みと失敗の連続でした。小学校の先生方や大学院の先生方に助けていただいたり、アドバイスをいただいたりすることで、気持ちにゆとりが持てるようになり、これまで子どもたちと真剣に向き合いながら学校生活を送ることができています。

そんな中で、「聞く・話す・書く力」の3領域を毎時間取り入れた授業作りに励んでいます。その実践を、臨任ゼミで紹介させていただきました。

このゼミには、校種・学年・教科もバラバラな3人が集まり先生方も参加してくださっています。同じ臨任という立場なので、思ったことや感じたことを率直に言うことができ、また、相手からの正直な感想を聞くことができます。このグループの中で実践を見ることで、自分の振り返りでは気づかなかったことが見えてきたり、自分の抱えている悩みの解決策が様々な角度から発見できたりすることで

次の実践につながるものを得ることができました。逆に、私が学校生活の中で当たり前に行っていること（机の座り方、筆箱、ノートの置き方など）が新鮮に感じられたとコメントをいただいて、驚くことができました。また、違う校種の実践を聞くときは、自分の立場に置き換えて考えるよう心掛けています。そうすることで、私の実践でも役立つことが見えてくることがあります。

これからのゼミでは、実践の報告だけではなく、本を読んで理論を学んだり、研究紀要を読み合ったりしていきたいと話しています。このゼミでは、日々の学校での実践につながるものを多く得ることができ、本当に充実しています。「教師として子どもたちに何をしてあげられるか」気付かないことがまだまだ多いので、このような臨任ゼミや合同カンファレンスで話し合い、先生方から今までの経験聞くことで、私の教師としての資質を上げ、少しずつ成長していけるよう励んでいきたいと思っています。



授業風景をビデオで見ながらの検討



ゼミの様子

## 特別支援教育ゼミについて

教職専門性開発コース 山崎 祥子（福井県立嶺北養護学校）

特別支援学校に勤務する講師が集まり、月に1度、ゼミをさせていただいています。合同カンファレンスでは、全員が同じグループになることはなかなか少ないですが、同じ校種だからこそ、どのような実践をしているか知りたいたち思っていましたし、自分のやっていることも聞いてもらい、アドバイスをもらいたいと思っていたため、このゼミはお互いの実践を聞き合う良い機会となっています。

相手の実践を聞くと、自分のこれまでの経験や今の状況と共通する部分が多々あり、自分自身を振り返ることができます。また、その経験を相手に伝えることで、再考し、とらえ直すこともでき、良い刺激を受けることができます。さらに、自分の実践を聞いてもらいアドバイスをいただくときには、新たな視点に気付かせてもらえますし、私が疑問に思っていることなどにも、素直な意見を聞かせてくれます。何より、同じ校種の人に話すことで、ある程度の基礎的な状況は分かり合え、より深くまで話し合えることがメリットだと思っています。

## 仲間に関われ、自分も変わる

教職専門性開発コース 加納 佳晃（福井県立嶺北養護学校）

特別支援学校の院生同士が、月に1回、夕方薄暗くなるころ大学に集まり、毎回一人一人が自分の実践で抱えている課題をテーマにして持ち寄り、議論を交わしています。

自分では必死に考えていたつもりでも、みんなの意見を聞くと、自分の考えが揺さぶられ、がらりと変わるときがあります。もっとしっかり考えなきゃいけないなと落ち込むこともあります。新しい提案や刺激にワクワクすることがあります。ゼミで得られた気づきが、次の日の実践につながっていくことが、何よりの大きな財産です。

一つの事例を挙げると、私が提供した話題で、文化祭を頑張ってやり通したNくんの実践がありました。苦手な行事に直面した彼の心の動きを追いながら、教師のかかわりがどうだったのかを皆と話し合いました。

その中でのお互いの指摘は、「そもそも文化祭に参加する必要があるのか」というものでした。文化祭は、小学部、中学部、高等部をあげての大きなイベントです。晴れの舞台で何とか活躍してほしいという教師や保護者の願いがあります。もちろん子どもにとっても、頑張りたいという気持ちは強いと思っていました。しかし、今の彼に本当に

なお、このゼミには大学の先生と、県立福井東養護学校の山田先生にも参加いただき、指導をいただいています。普段の合同カンファレンスとは違った、専門的な見地からの助言をいただけます。大学院に入ったからには、少しずつでも自分の専門分野を強くしたいと考えているため、先生方からいろいろな助言をいただければ、考えるきっかけを多く与えていただければ、楽しく感じています。

加えて、山田先生からは、学校現場のベテランの先生という立場から助言をいただくこともでき、とても心強く思っています。実践についての助言だけではなく、何気ない話の中にも、学校で生かせるヒントがたくさんあり、頼れる存在です。

これまでのゼミでは、1年のまとめに向けての助言をいただくことが主でしたが、余裕ができれば、それに限らない、いろいろな面での話し合いをしていく場としていければと思っています。

必要な活動なのかと改めて聞かれると、もっと違う形もあり得るのかもしれないという思いになりました。

自分の常識の中では当たり前になっていることも、視点を少し変えるとまだまだ考えなければいけないことがいっぱいだと気付かされました。子どもがどういう状態で、教師は何をねらいとして活動を準備するのか、改めて問い掛けられた思いでした。

また、他校の様子や実践を聞くのも、非常に興味深いものです。良い刺激になり、自分の実践を見つめ直す視点を得られるときがあります。最近ではお互いの学校の様子がだんだんと分かってきたので、仲間の院生が話す子どもの姿が、自分にもありありと見えてくるような気がしてきました。「あの子はどうなったの？」と、話題が共有されるようになり、子どもの変化や頑張りにもふと心やかかになります。お互いに、その後の展開が楽しみでもあります。

互いに切磋琢磨でもありませんが、悩みを分かち合い、思っていることをぶつけ合いながら、互いの実践が自然と深まっているような気がします。問い、問われ、話し合った中で得られたものを大切にしていきたいと思えます。

# Staff 紹介⑧

## 牧田 秀昭 まきた ひであき

早いもので、教員生活 26 年目をもう終えようとしています。これまでの職場はすべて中学校で、現在も運動部顧問ですが、新採用からの 10 年間は自他共に認める「勝利至上主義」の熱血顧問で、北信越大会へは 8 年連続で駒を進めました。数学指導も同様に「点数至上主義」。しかし、点数を上げるためには興味・関心を持たせないといけないことは自覚しており、教材研究はそれなりに進めていたように思います。そのような普通の中学校教師である自分の転換期となったのが、9 年間在職した福井大学附属中学校時代です。大学の 4 名の先生方との『探究・創造・表現する総合的な学習』『中学校を創る』の出版プロジェクトにかかわり、実践研究の意味を問い直すことになったのです。

赴任当時からなぜか研究企画の一員ではあったものの、理解不能な会話をしている同僚を眺めているだけのアウトローでした。そんな自分にも、毎年「教育研究集会」が訪れ、授業公開と教科研究の提案を求められることになり、曲がりなりにも研究を進めないといけない状態に追い込まれました。その中で一番苦しんだのは「オリジナリティ」です。それまでの自分は、「これは使える」という教材（むしろ授業ネタと呼んだ方がよい。）を探し出し、自分なりに解釈・再吟味して授業に生かすことが多かったのですが、それが意味禁じられたのです。したがって、書籍や学会誌を読むのでも、「これは発表されているから使えない」という負のスパイラルに陥り、悶々とした日々を過ごすこととなります。しかし、幸いなことに、大学の 4 名の先生方との交流（？）が徐々にできたり、稲垣忠彦、佐伯胖、佐藤学、秋田喜代美といった方々と直接話をする機会に恵まれたりして、一見すると数学からは少し離れた理論に触れることが契機となり、徐々に新しい自分だけの数学カリキュラムが生まれてきたように思います。そうしているうちに、アウトローだと自覚していたにもかかわらず、気が付いたら赴任 7 年目には研究主任になってしまっていたわけです。研究主任をしていた 3 年間での、研究テーマ設定、『中学校を創る』出版、大学院夜間主・学校改革実践

コースで著した『探究するコミュニティへのプロセス』は、それまでの私の教育活動をとらえ直す大きな機会となりました。

この附属中学校時代に、「記録」の意味につ



いて、外野からの声も含めて、いろいろ考えることがありましたが、実際に書いてみることによって見えてくることはたくさんあります。発せられた瞬間に消えていく発話ではなく、文字にするところに意味があります。常に、これでいいか考え直し、時間の流れを自分で組み立てることができるからです。記録は人に伝える媒体ともなりますが、最大の利点は自分の思考過程を明確化するところにあると思います。それが次の実践の最低ラインとなってスタートできるのです。実践記録は生徒の姿と教師の悩みや思考過程が共存しているので、イメージはより鮮明になります。附属中学校へ転任するまでの 13 年間を振り返る術は、その時の部活動の部長の顔や担任学級の中でも手を焼いた生徒の顔でした。毎年実践記録を書くことにより、記録と共に生徒たちの顔や教室の風景、授業の様子がよみがえり、「こんな実践をした生徒と共に過ごした 1 年だった」と振り返ることになりました。したがって、至民中学校でも私が赴任してからは、毎年 1 人 1 本の実践記録の執筆をお願いしています。授業でその年を思い出すような、こんな授業をした教員だと胸を張って言えるベースになればと思っています。「実践記録は名刺代わり」と言っている意味の一つはここにあります。

至民中学校に赴任して 4 年目になります。3 年前からは 70 分授業の実施、今年度からは異学年型教科センター方式の導入など、話題に事欠きません。様々な問題を抱える学校ですが、職員一丸となって新たな時代の教育を目指していることに喜びを感じています。公立中学校ではお座な



りになりがちな「研究部」にステータスが得られ、学校改革の中心で機能するような時代が来るよう、至民中学校は走り続けたいと考えています。

最後にもう一つ。今年度から公立学校の現職教員でありながら教職大学院のスタッフという変則的な立場になりました。「モデルケース」とも言えそうな自分にできるこ

## 廣澤 愛子 ひろさわ あいこ

福井大学に着任したのが一昨年の12月。まだ1年しか経っていないのがとても不思議なくらい、とてもなじんだ気持ちで日々を過ごしています。今改めて自己紹介となると何を書けばいいのか少しとまどいますが、私の専門についての紹介と私から見た「教師」という仕事についての印象を書いてみたいと思います。

私の専門は臨床心理学です。臨床心理学とは、心の傷や心の病を抱えた人に対する心理的支援(=心理療法やカウンセリング)という実際的なかかわりをベースに発展してきた学問で、私自身も、そのような実際的なかかわりを大切にしてきました。人は心の傷や心の病を抱えたとき、その傷に対して自己治癒力を働かせることが知られています。そのメカニズムについて明確なことは分かっていませんが、私自身は「その人自身の自己治癒力がいかに発現してくるか」に最も関心があり、それを研究テーマにしています。今のところ、「自己治癒力の発現」にはこちらの意図や考えを相手に伝えるというスタンスは余り意味がなく、あくまで本人の主体性が重んじられる環境の中で、本人が自発的に自己治癒力を発現させていくことが大切であるということが分かっています。

人が本来的に有している自己治癒力を信じるということ、口で言うほど簡単なことではなく、忍耐と根気、そして希望を失わずに待ち続けることのできる、ある種の前向きさが必要です。けれども、本人の心が主体的に動いていないときに他者がいくら良いアドバイスを提供しても、本当の意味での心の癒しは生じないのです。本人の心が動き出すのを待ち続けること、見守ること、そして動き出したらタイミングを逃さずに応じていくこと…。心理療法やカウンセリングとは、常に、相手との関係性の中で、微細な心の動きに耳を傾けながら、共に揺れ、共に考え、共に学びながら歩いていくプロセスだと言えます。

とは何かを考えながらの日々ですが、現場の教員として一緒に悩み考えながら、勇気や元気が生み出せればと考えています。重要なのはこのコースを修了してからどのような教員生活を送るかということだと思います。共に、志を高く掲げて歩みたいものです。



2007年8月  
蘇州学会

このことは、ある部分では「教育」や「教師の役割」とも重なっているように思います。子どもが自発的に疑問を口にしたときにこそ本当の学びが生まれること、教師は、子どものそのような探究心を引き出し、見守り、共に学ぶ役割を担う姿勢が求められていること、そして、日々、子どものメッセージや学級の雰囲気や耳を澄まし、それに応じたかかわりが求められていることなどは、私の臨床心理士としての仕事ととても重なると日々感じています。ただ一つ大きく違うのは、教師には「教科教育」という専門性があることだろうと思います。「授業」を通して子どもとかわるという教師のスタンスは、ほかにはない、教師ならではの専門性であるように感じます。そのような、教師にオリジナルな専門性を中心に据えながら子どもを理解しはぐくむというかかわりが求められている「教師」という仕事は、とても複雑で高い専門性が要求されていると感じます。専門性を磨くということはとても大変なことだと思いますが、教職大学院の一スタッフとして、私もできる限りのサポートをしたいと思っています。

教師と臨床心理士とではその専門性に共通点と相違点がありますが、お互いの専門性を尊重しながら、子どもを支援していくという点や教育や学校の在り方を考えていくという点で目的を共有し、共に学び合う関係を築いていくことができればと思っています。



## 遠藤 貴広 えんどう たかひろ

教職大学院協働研究員の遠藤です。所属は教育地域科学部附属教育実践総合センター（教育実践研究部門）で、専門は教育方法学です。

福井で生まれ育った私は、故郷福井で教員をやろうと、高校卒業後、福井大学に入学しました。学部時代は教育学よりも地理学に関心があり、授業の空き時間はだいたい地図資料室にいました。放課後は週4日バドミントン部の練習、残り3日は学費稼ぎにアルバイト、毎日の通学電車の中で読書…といった生活スタイルでした。

それが3回生の教育実習で授業研究のおもしろさに触れて一変。「自分は教育学部にいたけど、教育学について全然学んでいなかったな。大学院でもう少し教育学を学んでから教員になりたいな」と思うようになり、教員採用試験は受けずに、福井大学の大学院（社会科教育専修コース）に進学しました。このとき指導教員をお願いしたのは、現在、奈良教育大学の教職大学院におられる安藤輝次先生。学部時代、安藤先生の授業で自分の学びに対する構えが大きく変わったことは強烈な経験で、その秘訣を探りたいと、当時、安藤先生自身も実践で取り組んでおられたポートフォリオ評価法について研究しました。

当初の計画では、この後、福井県の教員採用試験を受ける予定でしたが、今度は教育学研究そのもののおもしろさにはまってしまい、さらに博士後期課程のある大学院に進学したいと思うようになりました。志望先は最初いろいろ悩みましたが、最終的には、教育方法学をベースにした教育評価研究の伝統がある、京都大学の教育方法学講座にし、田中耕治研究室の門をたたきました。幸い入試に合格し、2002年春、京都での研究生活をスタートさせました。

京都大学は研究資料が豊富で、入学早々、「あれもある、これもある」と興奮しながら、図書館の書庫によく入り浸っていました。また、研究室にはユニークな人が多く（八田幸恵さんもその一人）、休み時間コーヒーを飲みながら頻りに研究議論ができる場がとても快適でした（生活は初め苦しかったです）。

京都大学では、ポートフォリオ評価法の理論的母胎になっていた「真正の評価（authentic assessment）」論に関する研究を行いました。「真正の評価」論は、現実世界で大人が直面するような課題に取り組ませる中で評価活動を行おうとするもので、標準テストのみに頼る姿勢を批判する中で登場した考え方です。そもそも「真正の評価」という言葉で提起されたものは何だったのか。それはどのような教育方法・カリキュラム・教育思想を前提に成り立っ

ていたのか。それはどのような実践の中から生まれたものだったのか…といったことを京都大学在学中探究していました。その他、研究室の共同研究として、指導要録改訂期の教育評価の問題、京都市内の小学校との共同授業研究、PISAをはじめとする大規模学力調査の分析といったことにも仲間と共に挑み、ここで学んだことが今の私にとってとても大きな財産になっています。

こうして京都大学で楽しい時を過ごしたわけですが、博士後期課程3年を終わる段階では就職が決まらず、非常勤講師を掛け持ちして生計を立てるという生活が1年続きました。校務がほとんどない分、気楽なところもありましたが、ちょうど「高学歴ワーキングプア」という言葉がはやっていたときでもあったので、やはり人生への不安がありました。そんなときただだけに、去年福井大学への就職が決まったときは本当にうれしかったです。しかも故郷の母校で、その喜びは格別でした。私を採用してくれた先生たちにはもう足を向けて寝られません。

福井大学に就職して10か月が経った今、以前と同じような形での研究生活はできていません。週10コマほどの授業と専任教員としての校務、学外での研修や授業研究等々、日々の仕事をこなすので精一杯で、去年までのように学会で発表を続けるということが今年はできていません。ただ、福井大学の場合、どの取組も研究的にとってもおもしろく展開していて、同僚と協働して進められる日常の業務が今、新たな研究アイデアの源泉になっています。

日々の学生との対話もまた、重要な研究アイデアの源泉になっています。今接している福井大学の学生は皆、教育実践に対してとても鋭い感覚を持っていて、彼らから学べる視点は本当に多いです。今はもう、学生と一緒に議論していないと自分の研究が進められなくなっています。

さらに、言うまでもなく、教職大学院の院生の皆様から学べることも、とてつもなく大きいです。まだ10か月しかかかわることができていませんが、各実践現場での変化は本当にめまぐるしく、「こんなにうまく動いてしまっているの？」と、逆に心配になるくらいです。ただし、その裏には、院生はじめ、実践にかかわる方々のたいへんな努力があったわけで、そこから私はさらに学ばなければなりません。今後ともどうぞよろしくお願ひ申し上げます。



## 書評

### 『ハーバード・ビジネス・レビュー』

淵本 幸嗣（教職大学院准教授）



昨年末には深刻な金融不安が世界を駆けめぐり、年明け早々、トヨタが国内工場での生産を一時休止するというようなニュースに驚かされた。これまで以上にグローバル化が進展し、日本は社会構造の大きな転換期を迎えているように思う。この変化の激しい21世紀を子どもたちは生き抜いていかなければならないのである。その中でそれぞれの可能性を伸ばして、幸福で有意義な人生を送るためには、自ら考え、行動できる自立した個人でなければならない。教育は決定的に重要であり、教育活動の直接の担い手である教員の資質能力の向上が一層、求められるわけである。

教員は、国民の教育に対する熱い期待にこたえるために、資質・能力を高め、教育的な実践力を磨き続けていかなければならない。そのような教員が互的に協働し、チーム力を高めなければ困難な課題に立ち向かえないからだ。学校も組織である以上、組織力が問われるわけで、同僚性の構築や協働研究の日常化、さらには、学習する組織としていかに活性化していくかということは、これからの学校の重要な課題である。

このような新しいニーズを受けて、昨今の教員研修では、組織マネジメント等が花盛りである。この激動の社会変動の中であって、大いなる成果を上げている民間企業の手法に学ぼうという発想である。読者の中には目的や目標が違うのだからということで、全否定される方がいるかもしれないが、民間企業であっても、ものづくりを支える人づくりに懸命に取り組んでいる実践が少なくないのである。驚くほど教育に力を入れているわけで、これを参考にしない手はない。

「いかなる組織づくり、人づくり、リーダーづくりが行われているのか?」「不健康な組織をいかにして健康的な組織にしていったのか?」組織の活性化という視点から学校関係者が学ぶことも多い。

本誌は、全米で29万人が読むマネジメント誌の最高峰で、米国ハーバード・ビジネス・レビュー誌と全面提携した日本で唯一の総合マネジメント誌である。ビジネスの変化とマネジメントの未来をリアルに解説するダイナミックな記事は、経営する立場の者はもちろん、これから組織を支えていく若手からも多くの支持を得ている。ピーター F. ドラッカーをはじめ、多岐にわたる世界的な権威に加えて、日本の産業界や学会を代表する論客の「組織論やリーダーシップ論」に関する鋭い提言は、企業の枠組みに縛られることなく、教育関係者にとっても大変新鮮で示唆に富むものである。

たまには専門の壁を超えて、PDCAサイクル以外の切り口にも触れてみることは、脳にとってかなり刺激的なトレーニングになるのではないと思われる。

本誌は月刊誌で、写真は2008年8月号である。この中で一番印象深かったレポートは、インド人で従業員数8万人超の大企業インフォシスのCEOの『目の前の仕事に飽きた人を動機づける方法』である。「数字の話だけでは社員たちを奮起させられるとはとても思えない。私が心がけているのは、ちょうど私の恩師がしてくれたように、自分が貢献できる未来を思い描けるように後押しすることだ。」(本文から抜粋)

読んでいて思わずうなってしまった。読み進めていく中で、自分自身のこれまでの実践を振り返り意味付ける「省察」のスイッチがONになった。

本誌は歯ごたえたっぷり、若い人にはなかなか手ごわいかも知れないが、本質を見る力が鍛えられるので、ぜひ、一読を勧めたい。仕事を受動的にこなすのではなく、創造的なアイデアで「自分ならこうする」といった発想につながるだろう。

本誌を知識基盤社会を生き抜く上での参謀役にしてみてもどうだろうか。

## ラウンドテーブル・速報

主催：福井大学大学院教育学研究科教職開発専攻（教職大学院）

2/28(sat) 13:30-17:00

# 専門職として学び合うコミュニティ

For Professional Learning Communities

日本の教師教育改革のための福井会議 2009

*Session I* 13:40-15:00 福井大学総合研究棟 13階 大会議室他

## シンポジウム/教師が学び合う学校をつくる

/ 福井大学総合研究棟 13階 大会議室

稲垣 忠彦 (信濃教育会教育研究所長/東京大学名誉教授) 他

*Session II* 15:10-17:00

## 二つのワークショップ：教師の協働的な力量形成を支える

/ 福井大学総合研究棟 13階 大会議室・会議室

**Zone A:教職大学院のスタッフの力量形成** 教職専門性形成を支える協働研究  
教職大学院設置にあたって準備を行ってきた期間で学んだことや、これから力量形成の必要性を感じている課題について、小グループに分かれて各グループ3本ずつ程度各自の問題意識を報告しあい、議論しあいます。

**Zone B:学校における協働研究** その展開と組織を問い直す

学校において授業づくり・学校づくりのための協働研究をどのように進めていけばいいのか。一人ひとりの教師の関連な実践と協働研究の展開をどう支えていけばいいのか。長期にわたる協働研究の蓄積を持つ学校の取り組みから学びたいと思います。

3/1(sun) 8:50-14:40

# 学校改革実践研究福井ラウンドテーブル 2009

実践の長い道行きを語り 展開を支える営みを聞き取る

福井大学総合研究棟 13階 大会議室ほか

地域や職場で自分たちの実践をじっくり跡づけ、その省察をふまえて実践を編み直していく。地域・職場を大人同士が実践を通して学び合う協働体（コミュニティ）に変えていく。その中で一人一人が、省察的で主体的な実践者としての力を培っていく。そうした地道な取り組みが少しずつ蓄積されてきています。

試行錯誤を重ねながら大切に進められてきているそうした取り組みを、より広く伝え合い、じっくり展開を聞き取り、学び合う場を作りたいと思います。

小グループで実践の展開をじっくり聴き合います。

（6人ぐらいの小グループで進めます。1つの報告について1時間20分～40分程度を予定しています。）

実践記録を土台に実践の歩みをじっくり語っていきたいと思います。心に残っている場面。言葉、表情、行為。その時々感じていたこと。ふりかえる中で見えてきたつながり。話し合いと記録づくりの中ではじめて気づいたこと。いま改めて跡づけ直して考えていること。

語られる展開に耳を傾け、活動の場面を共有し成長のプロセスを探っていきたいと思います。実践の過程をじっくり語り・聞きあう場、実践を共有して協働探究できる関係がより広く培われていくことが、その後の実践への問いの深まりを支える拠り所になると 생각합니다。

### ●申し込み●

①氏名（ふりがな）、②所属・役職、③メールアドレス、④電話番号、⑤参加日（両日・2/28のみ・3/1のみ）を明記の上、2009/2/14(土)までに [dpdtfukui@yahoo.co.jp](mailto:dpdtfukui@yahoo.co.jp) へお送りください。なお、3/1の実践報告者を募集しています。報告くださる方は申し込みの際にお知らせください。（※第1次案内版につきプログラムの変更等があり得ます。）



# 報道ファイル

福井新聞社提供 2009.1.15

福井新聞社提供 2009.1.15

高度な専門知識・技能を持つ教員の養成を図るため、昨年四月にスタートした福井大の教職大学院。現職中堅教員向けコース（十九人）では、院生が勤務する小中高校での授業研究を通して新たなノウハウを伝え、学部新卒者向けコース（十五人）は同大附属小中など協力校の教壇で実践指導を行っている。大学の講義室を飛び出している。出前講義は全国でも珍しい画期的な方式。特に現職教員向けコースは院生の同僚教員を巻き込むようになり、学校全体の指導力底上げと期待がかかる。教師教育の新たな取り組みを追った。（山口剛記者）

## 福井大教職大学院の「出前講義」

現場教員向けコースの  
知場克幸・美浜中教諭  
（左）は大学院に入ると同時に、二つに分かれていた校内研究部会の一本化を提案。教科や経験の枠を超えた全教員を対象とする「検討会」への衣替えを促した。

昨年十一月下旬に同校で行われた検討会。教員約三十人が国語や数学、保健体育など七教員の授業を参観した後、六グループに分かれて学習指導の追いや生徒の反応などについて意見を交わした。大学院の権置昌一教授（右）は石井基子准教授は生徒の上手な発表は「一生懸命、プラスに作用する」とも、プラスに作用するなどと助言した。

検討会終了後、知場教諭と権置教授二人が反省会を開いた。両教員は「意見交換で若い教員がベテラン教員の指摘に対し、必死にメモを取っていたのは驚き。グループ別になど高く評価した。知場教諭は「専門教科以外の授業を参観すると、子どもの視点に立つ

## 現場指導で校内刺激

### 教師教育のモデル期待

生は「生は、時間の授業より高い指導力を求めた」と松本健一教授。中学校の教諭を指導する院生の藤川洋平さん（左）は、学部新卒者の院生による「出前講義」の仲間にふけられる。福井大附属中で行われた授業研究で福井大教職大学院の石井准教授（左）から指導を受ける教員たち—昨年12月、美浜中

て批評し合える。授業研究に教科の枠は関係がない」と、検討会の手応えを示す。福田洋一郎校長も「外部の先生からの指摘は刺激になる。教員全体の資質向上につながる」と語る。

「生は、時間の授業より高い指導力を求めた」と松本健一教授。中学校の教諭を指導する院生の藤川洋平さん（左）は、学部新卒者の院生による「出前講義」の仲間にふけられる。福井大附属中で行われた授業研究で福井大教職大学院の石井准教授（左）から指導を受ける教員たち—昨年12月、美浜中

の勉強に追われ、自らのくとし、「福井大を教職大学院のモデルにした」と意気込む。

おり、大学院に進んだ自らの選択に満足感を覚え、院生を一人当たり「〇・五人」とカウントし、その分、学校に増員配置する。松本教授によると、全学年の院生の勤務校をサポーターとして、昨年、院生を一人当たり「〇・五人」とカウントし、その分、学校に増員配置する。松本教授によると、全学年の院生の勤務校をサポーターとして、昨年、院生を一人当たり「〇・五人」とカウントし、その分、学校に増員配置する。

文部科学省の担当者は「な専門職としての扱いは学出前方式の講義について、生への実践教育が十分で、松本教授は二人の要、思い切った本県の採変わらない。現職教員採用試験の応募条件に大学生が勤務する学校全体の院生を加えてはどう指導力を底上げしていくか」と提案している。

2009年(平成21年)1月15日(木曜日) (日刊)

## Schedule

- 1/24 sat 入試ガイダンス (10:00-12:00)
- 2/7 sat 入学者選抜試験 (第2次) (9:00-)
- 2/14 sat 長期実践研究報告会 (9:30-12:30)
- 2/28 sat -3/1 sun 実践研究福井ラウンドテーブル
- 3/23 mon 学位記授与式

【編集後記】 2009年が明けました。今、スクールリーダー養成コースの院生は、長期実践研究報告書の作成の追い込みに入っています。今夏は、教職専門性開発コースの院生には、教員採用試験が待っています。教職大学院にとっては、いずれも、重要な評価項目の一つであります。この年が輝かしい1年になることを祈りつつ、Newsletterの発行を通して、学校や院生同士の協働を支えていきたいと考えています。

教職大学院 Newsletter **No.9**  
2009.01.16 発行  
2009.01.16 印刷

編集・発行・印刷  
福井大学大学院教育学研究科教職開発専攻  
教職大学院 Newsletter 編集委員会

〒910-8507 福井市文京 3-9-1 dpdfukui@yahoo.co.jp